

御厨 貴 編著

東京大学先端科学技術研究センター二十年のあゆみ

東大

Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo

先端研物語

「先端」とは何か——

常にパラダイムの転換を目指して動く「尖端」、
「先端」には過去がなく、
「先端」には現在と未来がある。

研究、組織システム、経営、人事、教育……様々な面で日本をリードしてきた東京大学先端科学技術研究センター20年の自省録。山崎正和氏の講演と、最相葉月氏他によるパネルディスカッションも収録。

中央公論事業出版 定価 本体1500円+税

結論の無い物語

東京大学先端科学技術研究センター所長 宮野 健次郎

東京大学先端科学技術研究センター（通称 先端研）が設立されて昨年（平成一九年）で二十周年を迎えました。これを記念して同年一〇月に「東京大学先端科学技術研究センター二十年史―ある一部局の自省録」を刊行しました。これは組織としての記憶をとどめるための、表の記録です。これに対して本書は、裏の記録とも言えるでしょうか。組織としての失敗、企図とは異なる結果に終わったプロジェクト、実行に移されなかった計画、などが表の記録に載ることはありません。しかし、人々が何を意図したのか本音がどこにあったのかは、このような事例に最も端的に反映されることも事実です。小林秀雄風に言えば「搦手から」先端研に迫る、これが編著者の御厨教授の作戦であったのでしょうか。普通、城内の人が搦手を城外に向かって見せることはしないものです。そのような意味で、本書はそれ自体が先端研的であると言つてよいでしょう。本書に描かれた、およそ国立大学らしからぬその立居振舞は、現代の冒険譚としては面白いのではないのでしょうか。少なくともそのような意味で「かつて先端研という組織があった」という読み物として楽しんで

でいただきたいと思います。

もちろん先端研は今でも存在します。にもかかわらず「かつて」と言う理由は、本書の内容から将来の先端研を占うことはできないだろうという思いがあるからです。なぜなら本書が示したのは搦手ではあっても、本丸ではないと感じるからです。組織は人です。そして人を動かしているのは、欲望や不安、その他もろもろの原初的・情動的な何かであるというのが私の独断と偏見に満ちた勘の教えるところです。本丸というのはこの何かを指します。であれば、その本丸を書いて本にしたらもつと面白いだろう、とお考えになるのは当然です。しかし、私のような文才の無い者にそのような大それたことができないうのもとより当然ながら、おそらくこれは達意の筆をもってしても文章にしたとたんに輝きや匂い、肌触りが失われてしまう類のものではないかと感じています。これはいわば *knowing* に属することであって、一目瞭然でありながら記述を拒む何かです。先端研が「七人の侍」の時代から肥大化したことは事実ですが、その全ての人についてそれぞれの本丸を *knowing* することが不可能なほど大きくは無いと思います。しからば、全ての本丸が開城されたとしてどのような将来が予見できるでしょうか。

残念ながら、先端研在任七年に「なんなし」とし、殆ど最古参の身になった私にもこれは全く分かりません。先端研を内側から知れば知るほど、この思いは強くなります。先端研では教授が一人去って別の教授が着任することは、そのまま状況の変更を意味します。人は状況を作り出しますが、状況が人を作りもします。この複雑なもつれ合い状態は、突然の変化をもたらしやすいものです。昨日までは想像もしなかった事態が、今日は普通の日常と感じられる。先端研に一貫した哲学があるとは思えませんが、もし何かがあるとすれば突然の変化に驚かないという風土でしょうか。あるいは、歴史や経緯について無頓着とも言えるでしょう。『二十年史』編纂の際に明らかになったように、先端研内部に史料が殆ど残っていないのはこのことの裏返しに他なりません。

このように、先端研で生起することは過去の延長上にありません。恐らくこれからも先端研は不意に鋭角的な方向転換をするのではないかと感じています。本書は「東大先端研物語」と銘打っていますが、これはあくまでも歴史になった先端研です。本当の先端研物語は結末に至れないという宿命を負っているのではないかと思います。